

2013年11月3日 礼拝メッセージ

聖書：ルカの福音書14章1～11節

説教：低い者と高い者

1 パリサイ派の指導者の食卓

1) イエスが招かれる

パリサイ派の指導者は、安息日になると家にお客を招き、食事を振る舞うことを習慣としていました。彼らは、一般庶民の人たちとは住む世界が違う、雲の上の人たちと思われていたそうです。ですから、食事の席に招かれる人たちも当然それなりの身分の高い人たちが集まることになります。

今日の箇所では、その食事の席にイエスが招かれています。考えてみるとこれは不思議です。イエスは、ことあるごとに人々の前でパリサイ派の信仰を強く非難してきました。人々の前で何度も恥をかかされてきました。イエスは邪魔者です。できれば殺したいと思っています。

それなのにどうしてイエスを招くのか。1節の後半に「みんながじっとイエスを見つめていた」とあります。イエスが何をするか、何を語るのかじっと見張っています。少しでもしくじるようなことをしたなら、そこを突破口にしてイエスを責め立て、イエスは信用できない人物であると人々に印象づけようと狙っているのです。

イエスは、もちろんそのことは知っています。ひるむことなく人々の冷たい視線に向き合っています。

2) 水腫をわずらう者

パリサイ派は、日頃から自分たちが考える律法を守ることに熱心な人たちです。食事に関して言えば、罪人と呼ばれる人たちといっ

しょについてはならないと教えていました。自分の身が汚れてしまうと考えたからです。ところが、その食卓には水腫をわずらっている人が座っていました。水腫をわずらう者は、パリサイ人の規定によれば罪人です。そんな人が宴会に招かれることは本来あってはならないことなのです。それなのに、どうして水腫の人がこの席に座っているのでしょうか。外見で水腫と判別できたでしょうから、手違いではなかったはず。その人はイエスの正面に座っていました。イエスが食卓に招いてくださったと考えるのが自然でしょう。

3) いやされる

4節の後半を読みます。「それで、イエスはその人を抱いていやし、帰された。」パリサイ派の規定によれば、いのちに関わるほどの緊急性がない限り、安息日に病気を治療することは禁止されています。ところが、イエスはそんなきまりごとを無視し、水腫をわずらっている人をいやされました。

「帰された」ということばは、ほかの箇所ですら「釈放する」とも訳されていることばです。イエスは、この人を罪という縄目から解放してくださったとも読むことができます。そのようなことが安息日に起きました。

パリサイ派の人々は、自分たちに真っ向から挑戦してくるイエスを苦々しく思っていますが、何も言うことができず、黙ったままでした。

2 披露宴の席順

話はここで終わりません。イエスは、披露宴に招かれたならどこに座るべきなのか、そんな内容のたとえを語り始めます。日本の文化では結婚披露宴の主催者は、招待する方々の席順に細心の注意を払わなければなりません。だれを上座に座らせ、だれが低いほうに座ってもらうか、席順を少しでも間違えば大変な失礼となります。招かれた人が怒りだし、最悪の場合は縁を切られるということも起きます。実際に、私の親戚ではそのようなことがありました。

結婚披露宴のような席ではなくても、会議や食事会や飲み会などで、自分がどこに座ればよいか、上司と部下、先生と生徒のような上下関係があると結構気を遣うことがあります。

その席順のことで、イエスは10節でこう勧めています。「招かれるようなことがあって、行ったなら、末席に着きなさい。そうしたら、あなたを招いた人が来て、『どうぞもつと上席にお進みください』と言うのでしょう。そのときは、満座の中で面目を施すことになります。」

似たようなことを皆さんも経験したことがあるでしょう。こんなことを言われるまでもなく、宴会のマナーとして心得ている方もいるでしょう。では、イエスは人々の前で恥をかかないようにと正しいマナーを教えるために、わざわざたとえを語ったのでしょうか。イエスはパリサイ派の指導者が招く食卓の席にあえて危険を冒して座っています。このことでイエスはますます憎まれ、十字架の道を歩むこととなります。そんな方が、単なる社会常識を教えるためにこのたとえを語るはずはありません。

3 イエス

1) 自分を高くする者は低くされる

むしろ、大切な真理を教えるためにこのたとえを語ってくださったはずです。どんな真理でしょうか。そのことを考える手がかりが11節のことばです。「なぜなら、だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるからです。」

まるで格言かことわざのようになっていて、私たちにはおなじみです。「高ぶってはならない。私たちは低くならなければならない。」これは、私たちへの警告である。おそらくそんなふう理解しておられるのではないですか。

でもどうでしょうか。ほかの人からいきなり、「このようにしなさい」と言われたら、皆さんはどう感じますか。何も考えずに従いますか。そんなことはないでしょう。だれでもまず「どうして」と問いかけるはず。少しひねくれていくと「いやだ」と言いたくなります。もつとひねくれると「そういうおまえは、どうなのか」と逆に質問します。

イエスはどのようなのでしょうか。私たちに「こうしなさい」というとき、この方が先頭を切って見本を示されます。11節のとおり歩まれます。

主は、神のひとり子です。最も高い所におられ、天と地を創造し、私たちを土のちりから形づくられた方です。ご自分を高くするという点については、そのような権利がある方です。神がご自分を高きとしたからと言って、神は高慢であると文句を言う人はいないでしょう。

ところが主は言われます。「自分を高くする者は低くされる。」これは何を意味してい

ますか。主は、高いところにおられるべき方なのに、低くされていきます。どこまで低くされたのでしょうか。安息日の律法を破り、罪人と食事をする者と言われ、人々から憎まれ、さげすまれ、最期は十字架に追いやられていきます。十字架で罪人として殺されます。死んで黄泉という所にまで降りて行かれます。それ以上のないどん底まで低くされていきました。

「自分を高くする者は低くされる。」主が十字架で死なれることを語っています。

2) 自分を低する者は高くされる

では、「自分を低くする者は高くされる」はどうでしょうか。主は、人の手によって低くされたというよりも、正確に言えば、自ら進んで低いほう低いほうへと歩んで行かれました。今日の箇所もそうです。パリサイ人の指導者とその取り巻きがイエスをじっと見つめて、隙をうかがおうとしているその真ん中で、彼らが怒り出すようなことをあえてやるのです。火に油を注ぐという言い方があります。わざわざパリサイ派の人々が怒り出すように仕向けています。もっと穏やかな方法があったはずなのに、イエスは神経を逆なでするような方法をあえて選ばれます。人の手によって低くされるように仕向けています。その結果、殺されてしまいます。いったい何の益があったのでしょうか。人の目には何も見えません。常識のある人は、愚か者の極みだと言うでしょう。

少し前になりますが、踏切の中で動けなくなった人を助けようと、ある女性が遮断機の下りている踏切の中に入り、亡くなったというニュースが報じられていました。倒れていた人は助かったそうです。それを聞いて多く

の人々は感動しました。

イエスはどうでしょうか。十字架で死なれましたが、それでだれかの命が助かったのでしょうか。だれもいないように見えました。

ところが三日目の朝、父なる神は愛するひとり子のからだを墓の穴からよみがえらせます。とことん低くされた者のいのちを神が高く上げてくださったのです。父なる神は必ずそうしてくださると、イエスは信じ続けていたのです。

十字架で主が死なれたとき、何も起きない、だれも救われない。そのようにしか見えませんでした。でも主は教えてくださいました。神が私たちを救ってくださる。そのことを信じ続けなさい。たとえ絶望するようなことがあっても、信じ続けなさい。あなたは必ず高くされていくのだから。

自分を低くしなければ。言われなくても知っています。多くの人は、難しいと嘆きます。主はできないことを命じたのでしょうか。そうは思いません。だれでもできることしか言わないはずです。

努力して低くなるのではありません。もう十分私たちは低いのです。ただ私たちはそのことを認めたくない。それだけです。

皆さんの心の中に何かありますか。強がっているけれど、おびえていませんか。自信満々に振る舞ってはいるけれど、実は自信がない。何でもできるように振る舞っているけれど、実は疲れ果てている。それが本当の姿ではないですか。

主は身を低くされ、宴会の末席に座っておられました。私たちはどうするのでしょうか。低い自分のままで、主の所へ行くだけです。そのままの弱い姿を神にお見せするだけです。なにも飾る必要はありません。主は喜ん

で、弱いあなたを迎えてくださいます。あなたのために喜んでいのちを捨ててくださる。主はそのような方です。